

2024 年度入学式 学長式辞

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。心から歓迎いたします。

ご父母、ご家族、保護者の皆さまにおかれましては、誠におめでとうございます。今日、こうして来賓の皆様方とともに、新入生の皆さんをお祝いすることができることを、本当に嬉しく思っています。

日本福祉大学は 1953 年、今から 71 年前に鈴木修学先生により建学されました。第二次世界大戦が終わり、混乱した社会のなかで、これからの未来をつくる志のある人財を輩出しようと本学をつくられました。鈴木修学先生は、宗教家であり、社会事業家でもありました。当時は不治の病として隔離差別されていたハンセン病の患者、戦争で親を亡くした子どもたち、まだ制度もない時代に障害のある人たちと過ごすなかで、これからの日本に福祉が必要だと考えたのです。

ただそれは困った人たちを救うためだけではありません。世の中で一番苦勞している人たちに寄り添い、彼らが幸せに生きていけるようにすることは、私たちすべての人間が幸せに生きていくことにつながる、そのために万人のための福祉が必要だと考えたのです。

みなさんは高校で「誰一人取り残さない SDGs」を学んできたと思います。日本福祉大学は 70 年前からこのことに取り組んできたのです。

日本福祉大学は、福祉を平仮名で「ふつうのくらしのしあわせ」と表現しています。みなさんは、どんなときに「ふつうのくらしのしあわせ」を感じますか。小学生に同じ質問をすると、「ご飯を食べているとき」「お風呂に入ったとき」「友だちと遊んでいるとき」そんな素朴な答えをしてくれます。たしかに、「ふくし」とは私たちの日常の生活のなかにあるのです。

でもこの当たり前のようにある「ふくし」が一瞬で崩れてしまうことがあります。1 月に起こった能登半島地震、被災地の復興はこれから長く続きます。日本福祉大学も災害ボランティアセンターを中心に被災地の皆様に寄り添いながら、支援を続けていきます。

また世界では、今、この瞬間も戦争が続いています。「ふくし」が護られるためには、平和と民主主義が必要なのです。

1985 年 1 月 28 日、長野県の犀川ダム湖でバス事故が起こりました。大学の授業でスキー場に向かっていた 22 名の学生と教員 1 名、バス乗務員 2 名、25 名が亡くなりました。美浜キャンパスの友愛の丘には慰霊碑があります。一度、訪ねてみてください。そこには穏やかで優しい風が吹いています。私はそこに立つたびに、「ふくし」の尊さと有難さを教わります。

「ふつうのくらしのしあわせ」が実感できるためには、自分や家族が健康であること。困ったときに相談できる人がいること。自分の役割や居場所があること。でもそれは自分ひとりだけでつくられるものではありません。多くの人たちと一緒にあって、協働していくこと、他者と共に生きていくことで、「ふくし」は実現していくのです。

今、日本の社会は人口減少や単身化が進み、分断と孤立が深刻化していると言われます。そうしたなかで「ふくし」という希望をかかげ、誰一人取り残さないという覚悟と高い専門性を身につけていく。それが日本福祉大学の学びです。

また日本福祉大学はそれぞれの専門分野の学びを基礎にして、学部や学問領域の枠を越えた、様々な学びを大切にしています。学生時代、いろいろなフィールドにも足を運んでください。今まで出会ったことのない人たちと対話をしてみてください。勇気を出して新しい世界にふれてみる。これまで縛られてきた学歴や偏差値といったものさしでは測れない世界があります。大人が作り出してきた既成の枠組みを疑い、新しい「ふくし」を自分の体験を通して見つけてください。

そんな充実した学部の4年間、あるいは大学院の2年間を過ごせるように、私たち教職員は、全力で皆さんを応援します。何か困ったときには、遠慮なく「助けて」と言ってください。皆さんが安心して、助けてと言えるキャンパスにしていきたいと考えています。

そして将来、皆さんがこの日本福祉大学で学んだことを誇りにして、社会に出ていくこと。それは皆さん自身の夢や希望を叶えるだけでなく、そのことがこれからの日本の社会をよりよくしていくことにつながる、鈴木修学先生はそう信じて、私たちにその精神を託されたのだと思います。

入学式にあたり、そのことを皆さんに祝辞としてお伝えし、こうして、皆さんと出会えたことに感謝して、お祝いの言葉といたします。

あらためて、ご入学、本当におめでとうございます。

2024年4月1日

日本福祉大学 学長 原田正樹